

森のようちえん まめとっこ

自然保育推進事業活動報告書

まめとっこの2021年度

わたしたち森のようちえん まめとっこは、安佐南区大塚地区にお借りしている築約100年の古民家を園舎として認可外保育施設の届出をし、森や古民家で、季節や天候・子どもたちの姿に合わせてフィールドを選びながら活動してきました。

新型コロナウイルスの感染状況や夏の大雨による影響を受けながらも、子どもたちの育ちの姿を見つめて可能な限り幅広い経験ができるように心を砕きました。そんな中で子どもたちの挑戦や成長はめざましく、今年もまた楽しく素敵な一年を過ごすことができました。

フィールド整備 (環境構成)

認可外保育施設として再出発するにあたって園舎とした築約100年の古民家に、今年度はたくさん手をかけて整備してきました。庭や周辺の草刈りのほか、裏山開拓も。スタッフ、園児保護者の力と心を合わせて整備し安全性と居心地のよくなった庭や裏山で、子どもたちの遊びが一層広がりました。



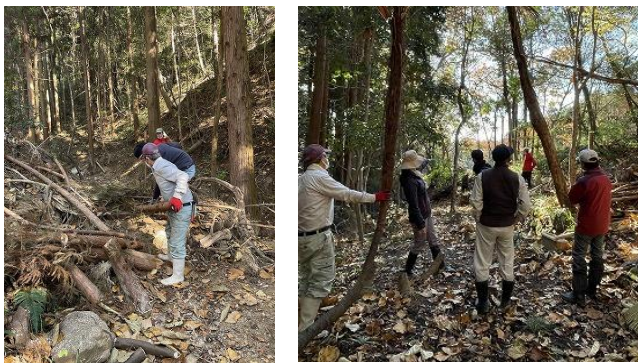
園舎の全景。日当たりのいい高台にあります。キジの散歩する姿に時々出逢えます。



スタッフ・保護者有志による春の草刈り。園舎の裏山と庭でタケノコ、フキという副産物も収穫できました！



園舎の裏山をお借りできることになり、子どもの自由な遊びを見守りやすくするために朽ち木や竹藪、雑木を整理しました。



開園当初からお世話になっている山本の森が夏の大雨で被災しました。恩返しの意味も込めて復旧作業をしました。

身近な植物で遊ぶ、活用する (遊びの事例)

まめとっこは、「仲間・自然・いのちの関わりを通して、しなやかに強く育つ」を理念のひとつとして掲げています。2021年度は遊びの中で身近な植物と関わる場面がたくさんありました。



八重桜を摘んで、桜の塩漬けをつくりました。翌年春の入園式で、新入園親子にふるまう桜茶に使います。



春のやわらかい草花を摘んで、りんご寒天の上にトッピング。ヨモギ、ノビル、カラスノエンドウ、スギナなどは天ぷらに。



野には色があふれています。さまざまな色の花や草を摘んでビニール袋の中で潰してみたら、きれいな色水ができました。色もいろいろですが、潰し方も人それぞれ。手で揉んだり、棒でついてみたり。色水ができたので画用紙や半紙に色を落としてみましたが、紙につけると意外と色が薄いんだ！という発見もありました。遊びには正解不正解はなく、自由な発想でいろいろ試してみることで、周りの自然や友達の姿から発想を得てさらに深めていくこと、それをまた何かに使ってみることが楽しいですよ。



秋冬の色。ヨウシュヤマゴボウやヒサカキの実を紙にこすりつけて、絵を描いたり色を楽しみました。(ヨウシュヤマゴボウの実はぶどうに似ていますが毒性があるので食べない・手を洗うよう注意が必要です)

公園で様々な木の実を拾って、クリスマス会で使うキャンドルホルダーをつくりました。別でつくった蜜蝋キャンドルを真ん中に立てて使いました。

一人ひとりの育ちを見守るということ

まめとっちは、何かができるようになることではなくて、一人ひとりがその人らしいペースでその人らしくいのちを輝かせて育つことを大切にしたいと考えています。それを支えるのが「信じる・待つ・見守る」保育です。だれかが促すタイミングではなくて、一人ひとりの子はその子のタイミングでその子の興味・関心・意欲が向かう遊び（主体的な遊び）から育つのを信じて待ちます。

…と言葉で書くのは簡単ですが、実際に信じる・待つ・見守る保育を実践するのはとても難しい。個性豊かな子どもたちが、小さいながらもまめとっこという社会（集団）に属しているわけで、安全管理上ある程度はまとまってもらい必要もあるからです。そして、見守る大人も一人ひとり違います。育ってきた環境も過程も、細かな部分での価値観も。子どもの姿を見守ると言いながらも、大人の価値観がつつい出てしまっていて、いらぬお節介を焼いてしまいたくなくなったりもします。

だからこそ、子どもたちのありのままの姿をいろんな人の目線で多角的に観察し、大人同士で細やかに情報共有をし、「今」の姿と子どもがこれから向かおうとしている姿を見取るよう努めています。

その難しさの部分にこそ大人の成長があると考えます。子どもが自分や家族をはじめとする周囲の人や世界を信頼して育っていけるよう、大人が自らを律しつつ見守って行きたいと願っています。そうして今年も、手出し口出しを控えたからこそ見えてきた子どもの姿がたくさんありました。



年中の秋に途中入園してきた男の子。楽しいことは大好きですが繊細なところがあり、これまでに通った一般園で自信を失ってきただけで、苦手なこと・疲れることは遠ざけたい気持ちでいることが多かったです。好きな遊びをマイペースに楽しむ経験を重ねたことと、たまたま森で見つけた宝石のような石を全部持って帰りたい！と強い思いを持ったことから、ある日突然、それまで避けていた「リュックを背負う・自分の荷物を持つ」をやりきりました。宝石のつまった重いリュックを背負って、起伏のある山道を歩ききる。こんな瞬間があるとは想像していませんでした。「（どうせ無理だろうから）いくつかだけにしたら？」と声をかけていたら、この瞬間はなかったのです。



年中の春に入園してきたときには、大人が斜面とは認識しないような軽微な傾斜でもこわくて自力では歩けなかった女の子。心は楽しいことが大好きで、森での毎日に心が動くのと同時に少しずつ傾斜や段差を克服し、森を駆け回れるようになりました。

ようちえん生活ラストに待ち構える3山にわたる年長登山は不規則な傾斜と段差、狭い場所の連続なのでどうなるだろうかと思っていましたが、大人の手助けを求めた場面はごくわずか。意志に満ちた表情で安全に上り下りできる道筋、足場、手をかける場所を自分で見極めて選び、3つの山すべてを踏破しました。2年間の森での生活が、ここまで彼女自身を育んだことに驚きました。



もともと達人的な森の楽しみ方をしていた女の子。卒園ごく間近な森で、かっこいい木をたくさん見つけました。どれも捨てがたかったようで、全部持ち帰りたいと願ったようです。いくつかずつ、みんなのいる場所まで運び始めました。この木は松の根っこ。ファットウッドとも言い、松ヤニがぎっしりつまった、朽ちた見た目を裏切るとも重い木です。



そろそろ下山しようかというとき。彼女は全ての木を持って帰ることに決めました。大人に少し手伝ってもらいながらリュックに木を収納し、ビニール袋にも入れてリュックにひっかけ、手にもいくつか持って歩き始めました。ビニール袋はほどなく破れ、何度か修正を加えて、みんなから遅れること10分。これだけの大荷物を持って最後まで自力で運びきりました。「重い、肩が痛い」と言い時折休憩しながらも、終始凜とした表情で。大人は褒めそやすことも過剰に声かけすることもなく、先回りせずただ安全を守るつもりでこの選択、行動を見届けました。

子どもは本当に、だれかからやらされて育つのではなくて、自分自身がやりたいと思う遊びの中で育つのですね。

研修受講状況

- 救急講習（3回）
- 多治見の自然を活かした豊かな子育てシンポジウム
- 森のようちえん全国交流フォーラム in 奈良（おうち de フォーラム）
- 森のようちえん全国ネットワーク 森のようちえんにおけるリスクマネジメント研修
- こども学セミナー 2021 ぷらす
- ひろしま自然保育推進懇談会、安全管理研修会
- 広島自然体験活動フォーラム2022 in 江田島
- すべての子どもにとって心地よい育ちの場を増やしていくために 私たちに今できることは

など